

G.E.ラッド著『終末論』から読み取る九つの遺言②

— ONE CHAPTER, ONE MESSAGE, FROM CH.4 TO CH.6 —

一 ご挨拶

先週より、三回シリーズで、一宮基督教研究所の今年度の取り組みとしての「サマー・スペシャル」について紹介・案内させていただいています。今日はその二回目です。今朝は、ラッド著『終末論』の4章、5章、6章から、最も本質的なメッセージをひとつずつ聴き取り、それを「今日のさまざまな状況」に適用することで、参加申込された方には「学びのための心備え」、参加を迷っておられ方には「誘い水」、参加できない方には「のぞき窓」を提供させていただきたいと思います。

「今日の状況」と申しますのは、先週の日曜日、この日本で起こった大きな出来事に関することです。わたしは、1868年-明治維新、1945年8月15日-終戦の日、そして「2016年7月10日-日本国民が憲法改正・改悪に必要な衆参両院で三分の二の議席を改憲勢力に与えた日」は、日本の歴史における大きな節目として記憶されることになると思います。

二 エステル記から見る 信仰者の苦難と戦い

最初に聖書を開きましょう。聖書箇所は、エステル記3章と4章です。少し長いですが、大切なことが書いてありますので読ませていただきます。わたしが奇数節を読みますので、皆さん偶数節をお読みください。この二つの章で教えられることには三点あります。

第一は、3:8にあるように、このメディア・ペルシャ帝国に、「王の法令」、つまり「国王崇拜」をしない民族がいたということです。

第二は、3:12-14 にあるように、そのような信仰者たちを、「国王崇拜しないなら、迫害、根絶する法律」が作られたということです。

第三は、4:13-16 にあるように、このような危機の只中で、「自分のなしうることを、命をかけてなした信仰者」がいたということです。

わたしは、大日本帝国憲法が廃止され、今の日本国憲法に変えられたことに、憤りをもって、現在の憲法を廃止し、大日本帝国憲法のような内容をもつ憲法を復活させようとする人たちがいることを知っています。そして、改憲派の中核に存在する「日本会議」の歴史的経緯やその活動内容をみていくと、わたしたちキリスト者にとって、まるでメディア・ベルシャ帝国で、神の民を迫害し、撲滅しようとしたハマンのような人たちのように思わせるのです。

わたしたちは、「キリストの花嫁としての意識」をもち、自由な信仰をもって生活のできる自由な教会、自由な国家のあり方を切望するものです。わたしは、自民党の憲法草案には、「キリストの花嫁の純潔を汚す」恐れのあるたくさんの危険な要素や仕掛けがあるように思います。わたしは、それらの危険な要素について、神学校や牧師会での講義・講演、DVD、Kindle の本、ホームページ、フェイスブック、ユーチューブ等、あらゆる機会を通じて警鐘を鳴らし続けてきました。

三 改憲の課題、問題点を読み解く

わたしは、現在の「日本国憲法」のすばらしさを少し知るものとして、このような「憲法が改悪されるかもしれない」という状況の到来を一日でも先送りしたいと考え、そのために微力を尽くしてきましたが、ついに「この日」—「憲法改悪・改正」が現実のものとなる日が到来しました。この新しい事態を受けて、わたしたちキリスト者にできることとは何なのでしょう。わたしたちキリスト者がしなければならないこととは何なのでしょう。そのことを考えねばなりません。改憲を目標に取り組んできた人たちは、一体何を目標としているのでしょうか。わたしたちは、そのことを見抜かねばなりません。彼らが目指している通りに「改憲」が

なされたら、一体どのようなことが起こるのでしょうか。それをシュミレーションしてみなければなりません。

私たちは、少数派です。大日本帝国憲法が内包する問題点は、敗戦という「特殊な事情」の下で、根本的に改善され、克服されました。しかし、わたしが見るところ、その「根本的な改善」を”骨抜き”にしようとする人たちが、熱心に改憲運動を推進してきました。改憲運動を推進してきた人たちの意向のままに、ある意味「理想的な憲法」は、変えられてしまうのでしょうか。聖書であれば、神様の聖なるみ旨の表現としての「十戒」にあたる、日本国の「憲法」に、少数派であるわたしたちの願い―「キリストの花嫁の純潔」を守る思想・信条の自由、信教の自由等の基本的人権がおかされることのないように十分に警戒し、また戦うことが必要だと思わせられています。

わたしは、私たちは少数派なので、まともに戦うなら「負ける」可能性が高いと思います。

しかし、少数派の主張するメッセージが、価値観が、普遍的で、多数の人たちにとっても「いのちの同じくらい大切なもの」であるとの理解を共有してもらえるならわたしは「価値観」で多数派を形成することができると思います。わたしの確信のひとつとして、キリスト者がいのちを賭けて守って来た「キリストの花嫁としての純潔」は、日本人にとって最も必要な「基本的人権」を守るために原点に位置する「価値観」であると思います。このような視点を念頭に抱きつつ、ラッド著『終末論』の4章、5章、6章から、ラッドが最も語りたかった「遺言」としてのメッセージのエッセンスに耳を傾けましょう。

四 遺言としてのメッセージ④

ラッド著『終末論』第四章から聴き取る、ラッドの第四の遺言メッセージとは何でしょうか。第四章は、「新約聖書に書かれているキリストの再臨の意義を把握するためには、聖書神学の基本的な特質の全体像を知る必要がある。」という言葉で始められています。「聖書神学の基本的な特質の全体像」とは何でしょうか。それは「見える自然界の实在」と「見えない霊

的世界一神の住まい」の存在です。神さまは、この「見えない霊的世界」から、「見えるこの被造物世界」を訪れ、支配され、人間にその世界の管理を任せられる方であるということです。その管理が、罪と墮落によって、乱れたものになっているので神さまは「審判と救い」のみわざをもって介入し、この世界の健全な管理を回復されるということです。

最後の箇所では、「旧約聖書に預言されている終末的な神顕現一神の栄光ある現れ一は、神の普遍的な支配を確立する。しかし、新約聖書は、その預言をキリストの再臨という視点から再解釈している。キリストは天的な人の子として来て、御国を聖徒たちにもたらし、メシヤたる王として王国を支配される。」ということばで閉じられています。

五 遺言としてのメッセージ⑤

ラッド著『終末論』第五章から聴き取る、ラッドの第五の遺言メッセージとは何でしょうか。

第五章は、「多くの福音主義の教会において悲劇的な主題となってきたひとつの問題を取り扱わなければならない」という言葉をもって始められています。それは、「再臨は、クリスチャンのみを携挙する空中再臨と患難期を間において、聖徒とともに降りて来られる地上再臨の二つを主張する解釈」がいかに誤ったものであるのかを明らかにしています。

それはどのようにして明らかにしているのかと申しますと、ハーバード大学を出て、ギリシャ語をも教えていた専門家として、聖書の文脈を丁寧にひも解き、ディスベンション主義聖書解釈によくみられる「こじつけ解釈」の誤りを指摘しています。ポイントのひとつは、再臨を教える聖書箇所で使用されている三つのギリシャ語で、「パルーシア」「アポカリプシス」「エピファネイア」がひとつの出来事を指して使用されている「同義語」であることを立証しています。

そして、最後では、「主の再臨について使用されている語彙は、キリストの二つの到来または到来の二つの局面があるという見解に、いかなる支持も与えていない。反対に、キリストの来

臨が単一、かつ不可分な栄光に満ちた出来事であるという見解を立証している。」ということばで閉じられています。

六 遺言としてのメッセージ⑥

ラッド著『終末論』第六章から聴き取る、ラッドの第六の遺言メッセージとは何でしょうか。

第六章は、「主ご自身とサタンの諸勢力との間のすさまじい戦いが、主の奉仕の中核部分でなされてきたことを、私たちはみてきた。」そして、「神の国とサタンの王国の間の戦いは、事実上、世の終わりに反キリストが現れるとき、劇的に終幕を迎える」という言葉をもって始められています。

そして、「ダニエル書と福音書の解釈を丁寧に、比較検証しています。ダニエル書解釈ではディスペンセーション的解釈の誤りを指摘し、正しいメシヤ的解釈を提示し」、福音書解釈では、「神の宮に座を設け、自分こそ神であると宣言します」を「不法の人が、主の代わりに自分を礼拝するよう人々に要求するのかを描写する比喩的な方法」と理解しています。このことは、キリスト教シオニズムの教えのひとつである「エルサレムの丘の上のイスラム寺院が壊され、ユダヤ教の神殿の再建が、主の再臨の前提であるとし、それをけしかけ、支援する教え」を誤った聖書解釈とするものです。また、黙示録の 144000 人の数字をはじめ、

ユダヤの諸部族への言及を、旧約聖書の用語を用いての、「真の神の民である一キリストを信じるユダヤ人と異邦人を含む人々」を象徴する用語と解釈しています。

そして、最後では、「真の教会が患難や迫害から逃れるということではない。彼らはたとえ殉教させられたとしても、真の意味においてだれひとり失われることはない。神は神の民に刻印を与え、殉教の只中においてさえ、（霊的に）安全に保護してくださる」、「獣は、信仰者を殉教に追い込むことにおいて殉教者たちに打ち勝とうとする。しかしその同じ殉教において、殉教者たちは獣に打ち勝つ。獣は殉教者たちにキリストを否定させることはまったくでき

なかったからである。これは、殉教者たちの勝利、つまり患難の只中におけるキリストに対する忠節である」ということばで閉じられています。

六 遺言としてのメッセージ⑥

今日は、福音派諸教会「共有の福音理解」を耕し、根づかせるという意味で、ラッドの絶筆『終末論』の三つの章から三つのメッセージに耳を傾けました。準備をされていて教えられますことは、神学教育機関においても、伝道・牧会・信徒教育の場においても、ラッドが指摘しているような「福音理解において最も基本的な事柄」が繰り返し学ばれる必要があるということです。家でいえば、「土台」であったり「大黒柱」であったりする部分なのですが、そのあたりの「福音理解における基本構造」の部分が結構ゆらいできている時代なのではないかと思われれます。日本は、地震の多い国です。学校等の公共建築物を中心に「耐震化」が取り組まれています。

日本は多神教の国です。「神道的キリスト教」とか「仏教的キリスト教」というシンクレティズム（しらずしらずのうちに、宗教混交）にならないために、より徹底して「福音理解における基本的な部分」が繰り返し、反芻され、受肉し、血となり、肉とされていくことが大切と思います。もしこのような取り組みに関心のある方がおられたら、どなたでも参加申込して下さいましたら感謝です。では、お祈りしましょう。

以 上